

歪む連理

鹿児島市立鹿児島女子高等学校 三年

西 遥華

今年はいつ帰ってくるの——。美容室を営んでいる母がメッセージを残していた。二十九日には帰って来るから、と打ち込んで、携帯を伏せる。

左手に持ったグラスを小刻みに揺らしながら、藤原清香は細く息を吐き出した。目の前でテーブルに突っ伏しながら、涙声で話をしている親友の内谷玲子に何をいうわけでもなく、ただ彼女が落ち着くのを待ち続けている。酔いが回って大声で話すサラリーマンのグループも、慌ただしく動き続ける店員も、今は全く気にならない。

店に来てから三十分程経過したが、テーブルには梅酒と生ビール、つまみの枝豆以外何も載っていない。話を聞き終えたら他のメニューを頼む予定だった。

「昨日仕事が終わった後、携帯を見たらメッセージが届いていたの。『予定が合わないし、新しい彼女できたから別れよう』だって。こっちはあんたのためにどれだけ貴重な休みを使ってきたと思ってるの、って怒鳴ってやろうと思ったわ」

玲子が少しだけ顔を上げて、上目遣いで清香を見つめた。

目が真っ赤だ。

化粧が落ちるよ、と少しだけ笑って、梅酒をひとくち飲んだ。氷が溶けてきているせいで味が薄くなっている気がする。

「まあ落ち着きなさいって。世の中に男なんて星の数程いるんだから」

「分かっているけど……このままじゃ三十路まっしぐらだわ」

ようやく顔を上げた玲子がジョッキを片手に持ち、ぐいっとビールを喉へ流し込んだ。店に来て早々、とりあえず生で、と真顔でいった彼女の様子を思い出して、口元に笑みが浮かぶ。つまみの枝豆をぶちっと取り、口の中に放り込む。

「私も、清香みたいに美人だったら恋愛も仕事も上手くいったのかなあ」

「私みたい、って。私にどんなイメージを持ってるの」

「ワインとタバコと赤い口紅が合うお姉様」

「飲んでるのは梅酒だし、タバコも吸わないわよ。それに同年じゃない」

それもそうかと玲子が苦笑する。先程と比べて幾分か調子が良くなってきたらしい。清香は近くにいた店員に、追加の生ビールと焼き鳥、串カツの盛り合わせを注文すると、残っていた梅酒を飲み切る。

「玲子、明日は仕事休みだったよね？ 今日奢るから、好きなだけ飲んでいいよ」

グラスの中の氷がカラン、と音を立てた。

*

濃い紫とオレンジの絵の具を零したような空が広がって

た。

女の朝は早い。例え前日に飲みに行っていたとしても、決まった時間に起きて身だしなみを整える。五時三十分。アラームが鳴り、清香はうつすらと目を開けて起き上がった。年末が近付いてきているから、ここ最近は朝も寒い。ずっと布団の温もりを感じながら寝てしまいたい衝動に駆られる。

寝ぼけ眼でコーヒーを淹れ、そのまま朝食と弁当を作る。

玲子と飲んでいたら、気付けば日付が変わっていた。それ自体はよくある話だが、いつもより長く飲んでいたせいで頭が痛い。

朝食を食べ終えた清香は、歯を磨いて前髪をヘアバンドで留めた。洗顔フォームを泡立てて顔を洗い、水で流す。タオルで優しく拭き取って寝巻から着替え、化粧ポーチを手を取った。

改めて鏡で自分の顔を見ると、隈はできていないものの疲れが滲み出ているような気がした。念入りに化粧を施し、上手くカバーできたところで、髪をヘアゴムで結った。

そこまででたっぷり一時間半は使った。鞆を取り、バス停へと歩き始める。会社まではバスで四十分だ。外に出れば起きた時とは打って変わって、空に眩しいくらいの水色が流されていた。寒っ、と思わず口に出す。

バス停に着いて数分後、バスが来たので清香はそれに乗り込む。会社員や、真面目に勉強している学生で席が埋まっていた。

流れて行く景色を眺めていると、普段は誰も立っていないバス停に止まった。乗り込んできたのは偶然にも同僚の高橋で、あちらも清香に気付いたようだった。

「藤原、おはよう。このバスだったんだな」

「おはよう。車は？」

「室内灯点けっぱなしでバッテリー上がった」

「それはまた、残念だったわね」

バスが再び止まり、また一人乗り込んだ。相変わらず朝は混む。吊革を握りつつ、高橋の話に耳を傾ける。

バスが急カーブに差し掛かった時、車内が大きく揺れた。

清香が一瞬体勢を崩したところを、高橋が支える。

「ごめん、ありがとう」

「…：藤原って、ピアス片方にしか空けてないんだ」

「え、今更？」

「今まで気付かなかった。何で片耳だけ？」

清香は片耳を触った。そこには二つ穴を空けており、仕事中は付けていないが、外出時はシンプルなピアスを付けている。反対側は穴を空けていない。

「何年か前に空けたの。願掛けみたいなものよ」

清香はそう答え、耳から手を離す。その時にショルダーバッグの中にある携帯が震えた。取り出して確認してみる。二歳年下の従弟の亮からだ。あの子は朝から元気ね、と思わず笑ってしまう内容だった。バスの中なので、返事は後で送ることにした。

次は、S病院前です、とアナウンスが流れたので、降車ポタンを押してバスを降りた。

市街地から離れた場所にある「S病院」が清香と高橋、そして玲子の職場だ。

病棟までの道のりを歩きながら、清香は目線を上げた。視界いっぱい広がる青が気持ち良い。

「昨日、リハ科の内容と飲みに行っただけだね」

「おい、次の日も仕事あるのに飲むなよ」

「あの子は休みだったし、私も少ししか飲んでないから」

「相変わらず仲良いな、お前ら」

「専門学校時代からの仲だもの。じゃあ、また後で」

そういう、清香は高橋と別れて更衣室に入る。室内では後輩が先に着替えていた。何やら嬉しそうに顔を綻ばせている。彼女の手元が一瞬鈍く光った。

「藤原さん。おはようございます」

「おはよう。今日は何だか嬉しそうね」

「はい。実は彼氏から昨日プロポーズされたんです」

「あら、おめでとう」

それは嬉しいわけだ。と思うと同時に、昨夜の玲子の言葉がふと脳裏に浮かんだ。

——このままじゃ三十路まっしぐらだわ。

考えてみれば清香も玲子も齡二十八である。恋愛に関してはそれなりに経験してきたが、結婚に至るまでのものはなかった。というか、今までの彼氏が駄目人間ばかりで結婚の話

が出る前に別れた。我ながら男を見る目がないな、と思う。

制服に着替え、ショルダーバッグの中に入れておけばなにしていた携帯を取り出す。放置していた亮からのメッセージに既読を付けて、素早く返事を打ち込んだ。

『今日も玲子先輩のこと色々報告求む』

『玲子は今日休みだよ。ドンマイ』

高校時代、玲子の後輩だったという亮は、かれこれ十年近く彼女に思いを寄せているらしい。亮は必死にアプローチしているものの、玲子は全く気付く素振りを見せないようだ。

送ったメッセージに既読は付かなかった。時間的にも、あちらはあちらで仕事の準備をしているのだろう。携帯の電源を切って、バッグごとロッカーに押し込む。

あと三十分もすれば朝の申し送りが始まる。制服の裾を翻して、清香は自分の持ち場へと向かった。

*

「ねえ、藤原さん。人との繋がりは大事にしなさいよ」

点滴の針を刺す血管を探しながら、患者の女性と話をしていると、そんなことをいわれた。

女性は微笑みながら、清香に腕を差し出している。疑問符を浮かべながら、彼女に聞き返した。

「繋がりますか」

「そう。仕事に関しても恋愛に関しても、誰かとの関わりを大切するのは重要なことよ。お節介かもしれないけれど」

女性はふふ、と上品に笑う。

専門学校生時代、勉強はできたが、友人を作ることは下手だった。玲子と親しくなれたのも本当に偶然だったよなあ、と清香は看護学生だった頃の事を思い出す。

看護学科の清香と、理学療法学科の玲子。学科も違えばフロアも違うし、寮だって部屋が近いわけではなかった。

偶然食堂の席がとなりになって、偶然意気投合しただけだ。まさか就職先も同じ病院になるなんて誰が予測しただろう。加えて、自分の従弟の先輩ときた。世間は非常に狭いのだと痛感する。

「繋がりといえば、十年近く仲良くしている職員ならいますよ。でも、どうしてそんなことを？」

「藤原さん、何だか悩んでいるような感じだったから。繋がりを大切にして、何かあったら助け合えるような関係って、やっぱり必要だと思うの」

「確かに、そうですね」

「勘違いだったらごめんなさい」

「いえ、良いお話を聞きました。それじゃあ、点滴します」消毒をして、針を女性の腕にぷつりと刺し、左手に持ったペンでカルテに記録してから病室を出た。

悩み、か。

できるだけ顔に出さないようにしなければ、と自分を叱責する。

ここ数年は、特に悩みの種が尽きない。両親から早く結婚しろと急かされることもその一つだし、患者やその親族から

何かとクレームが入ることも含んでいる。しかし、一番の悩みはきつと、自分自身だろうな、と清香は溜息を吐く。

けれど、勤務に自分の悩みなんて関係ない。

その後も検査出しや清拭など、いつも通り慌ただしく動き続けた。

仕事が終わったのは定時を三十分程過ぎた頃だった。更衣を済ませ外に出ると、肌を刺すような風が吹いた。ああ寒い寒い、と独り言を呟きながらバス停へと足を動かす。

前方に一組のカップルが歩いているのが見えた。彼女の方は彼氏の腕に手を回している。まあお熱いこと、と彼らを一瞥して、清香は横断歩道を渡った。

バスの時刻表を見ると、次は十五分後に来るようだった。そういえば最近ダイヤ改正があったのだったか。少し前までは一時間に五、六本あったバスが、今ではその半分だ。

ネットニュースでも見て暇を潰せばいいかと、携帯を触る。女優のスキヤンダルやら、紅白歌合戦の話題やら、ダイエツトサプリの広告やらで溢れ返っていた。

十分程記事を読んでいただろうか。不意に肩を叩かれ、反射的に振り返る。

「やっぱり清香だ」

その顔には、見覚えがあった。いや、見覚えがあるなんてものじゃない。清香の肩を叩いたのは、何年前に付き合っていた梶田という男だった。県外の企業に勤めているはずの彼がなぜここにいるのか疑問に思ったが、清香はそれを聞く

前に自身の肩に置かれていた手をやんわりと外した。

「清香、元氣だった？」

「まあ、それなりに。秋彦は何でここにいるの」

「妹が結婚するっていうから、有休取って戻って来たんだ」

「へえ、良かったじゃない」

清香はそういいながら、梶田と少しだけ距離を取った。

昔の恋人と話すのが気まずい、ということもあつたが、何より彼自身が苦手だったのだ。

「そうだ、これから暇？」

「一応。家に帰るだけだし」

「良かったら、久し振りに食事にも行かない？ お互い何年も会ってないわけだし、色々話したい。奢るから」

「あと五分でバス来るんだけど」

「タクシー代も出すからさ」

にこやかにそういわれ、清香の心が揺らいだ。この何を考えているか読めない表情に一抹の不安を覚えつつも、あの時から変わってくれたのではないか、という期待も持っていることは否めない。

「少しだけなら」

結局清香の方が折れ、梶田に誘われるまま歩き出した。目的地は歩いて十五分の場所にあるレストランだという。

歩いている間、梶田は執拗に話しかけて来るわけでも、逆に全く話さないわけでもなく、清香の歩調に合わせて歩き、時折話を振るだけだった。仕事はどう、ちゃんと休めてるの、

年末年始の予定は――。

淡々とした口調で返事をして、梶田は寧ろ嬉しそうにするから居心地が悪い。

レストランまであともう少し、というところで再び梶田が話しかけた。

「今、恋人がいる？」

「……デリカシーの欠片もないわね」

一番聞かれたくない質問だった。別に答える必要もないだろうと、口を噤む。

「恋人は」いない。

しかしそれを無言の肯定と受け取ったのか、あるいは何か思うことでもあつたのか。梶田は面白くなさそうにいった。

「いる、ってことかな」

梶田が足を止めて清香の方を見た。相変わらず微笑をたたえていたが、言葉には温度がない。身体が強張るのが分かる。

清香は目を逸らして、緩く首を振った。

――あの時のことは、もう思い出さなくなかったのに。

「誰、俺の知ってる人？」

「関係ないでしょう」

「関係あるよ」

「しつこいわね」

帰る、とだけいって、清香は踵を返す。腹の底に溜まった嫌悪感を、一刻も早くどうにかしたい。

梶田が腕を掴もうとした。しかしそれは叶わなかった。そ

の手を遮り、二人の間に男が立ったからだった。

「公共の場で何をしてるんですか」

男の——高橋の聲が、やけに頼もしく感じられた。こんな状況に陥っていなければ、漫画みたいな展開ねとからかうだろうが、それどころではない。

梶田の返事を待たずに、高橋は清香の背中を軽く叩いた。

「帰ろう」

早くこの場から遠のきたい一心で、清香は反射的に頷いた。

「一度壊れた関係は、元に戻らないんだよ」

梶田に向けての言葉だったが、同時に自分にもいい聞かせるものであった。

歩き出しても梶田は追いかけてこなかった。

きた道を戻り、病院前のバス停まで来たところで、清香は数回深呼吸をし、高橋にまず謝罪をした。巻き込んでしまつて申し訳ない、と。

「元カレなの」

高橋は表情を変えなかった。二人の関係性を察していたからだった。

「結構しつこかったから助かった。それにしても、どうしてあの場所に？」

「後輩が店を開いたっていうから、見に行ってたんだ。タイミングが良かったな」

「本当にね。……ああ、気分が悪い」

「大丈夫か？」

清香は首を横に振った。精神的に参っている。

あの嫌悪感は未だに拭えていない。

「高橋、明日のシフトは？」

「……休み、だけど」

「良かった。お願いがあるの」

「どうした」

「話を聞いて欲しい。聞き流すだけで良いから」

彼は迷っているようだった。当たり前だ。急に話を聞いてといわれたら、誰だって躊躇うだろう。

バスが向こうから来ているのが見えた。やっぱり忘れて、何でもない。そういおうと清香は口を開く。

しかしそれより先に、高橋が答えた。

俺の家の方が近いから、そこで良いなら聞くよ——。

思えば自宅に戻ってから電話越しに話すという手もあったのだが、やはり誰かが目の前にいた方が安心するだろうと、いかにもそれらしい理由で自分をいいくるめる。

頷いて、目の前に停車したバスに二人で乗り込んだ。

空いていた席に腰を下ろす。何か話すわけでもなく、ただ窓越しの景色を眺める。普段から見慣れている街だ。特に変わったところはない。強いていうなら、降りるバス停が違うということだけ。それでもどこか仄暗く感じてしまうのはきつと、陽が落ちてしまったからという理由ではない。

憂いに満ちた様子の清香を、彼女の同僚は心配そうに見つめ、やがて自身を責めるかのように俯いた。

暫く車内で揺られ――次、降りるよという声で清香は我に返った。高橋が降車ボタンを押し、ICカードを取り出す。それに倣って清香もシオルダーバッグの中からパスケースを引っぱり出して、普段は使わないバス停で降りた。

高橋の住むマンションは、バス停から歩いて十分のところにあつた。この三階、とだけいって、彼はそのまま階段を上りはじめた。高橋の背中を追いかけて行くと、三〇五のプレートが付いた扉の前で止まった。そこが高橋の部屋だった。

「どうぞ、入って」

「お邪魔します」

反射的に頭を低くしながら入る。高橋が後ろから手を伸ばし、電気と暖房を点けた。

シンプルで整理整頓された、彼らしい部屋だった。

「適当に座ってて。コーヒートココア、どっちか飲む？」

「ココアで」

「ちよつと待ってて」

そういい、高橋はポットで湯を沸かし始めた。とりあえず腰を落ち着けようかと、ソファの前に座る。ソファに座ればいいのに、と笑われた。

部屋をぼんやりと見つめていると、一角に女物の服が畳んで置かれていることに気付いた。恋人のものであるうか。

「高橋、あなた彼女いたの」

「何で？」

「そこに女性物の服があつたから」

「それ、姉さんのやつ。この前終電逃したからって泊まって行ってさ。まだ取りに来てないんだよ」

やがて高橋が清香の正面に腰を下ろし、ココアの入ったマグカップを渡した。ゆらゆらと湯気が立ち上っている。それを啜ると、冷えた身体がじんわりと温まった。

「話しても良いかな」

高橋が頷いたのが見えた。清香はもう一度だけココアを啜り、カップを机に置いて話し出した。

「さっきもいった通り、あの人は元カレ。五年前だったかな、確か一年ちよつと付き合ってた」

SNSを通じて知り合った二人は、好きなアーティストが同じという理由から意気投合し、頻繁に連絡を取り合う仲となった。やがて住んでいる場所も同じ市だと知ると、今度は実際に会うようになった。

ライブも二人で行ったし、食事に出かけたこともあった。より親密な間柄になるのに、時間はかからなかった。

交際を申し出たのは梶田の方からだった。初めて会った日から三ヶ月が経った日のことだった。

「最初は本当に素敵な人だなんて思ってた。年は私より上だったし、紳士的だったから。でも、半年が経った頃から、何だかおかしいな、ってちよつとずつ感じ始めて」

スケジュールを毎日確認され、チャットの返信が遅ければその理由を聞き出される。酷い時には浮気を疑われた。早い話、梶田は束縛が激しい男だったのだ。

「これはあくまで一部ね。うんざりしていたんだけど、彼が怖くて、別れはなかなか切り出せなかった。逆上でもされたらどうしよう、って」

どう対処すべきか迷っていた矢先、その悩みに気付いた人物がいた。

その人物はさりげなく清香から悩みを聞き出し、話を一通り知ると、梶田と電話を繋げて欲しいといった。

そして、電話越しに怒りを露わにして、
——あなたのやっていることは、清香への愛情でも何でもない。もう清香の彼氏面をするな、といって、一方的に電話を切った。

「二ヶ月くらい経った頃だったかな。また彼が電話を掛けて来たんだけど。県外の方にある本社に異動になった、ついでわかれて。あれで終わりにするつもりだったんだけどなあ」

あの人がいなかったら、どうなっていたことやら——。清香は苦笑して、まだ熱を持っているココアを冷ましてから飲みきった。

当時の自分はかなり悩んで迷っていたはずなのに、あっさり終わってしまったのだから皮肉な話だ。残念なことに、望んでいなかった梶田との再会は最悪で、彼自身はほとんど変わっていないかったが。

「聞いて良いか分からないけど、あの人がってというのが、その想ってる相手……って解釈で良いのか」

「話、聞こえてたんだ。うん、そうよ。前々からそういう気

持ちはあったのかもしれないけど、助けてもらった時に自覚した、って感じじゃないかな。絶対に叶わない恋愛だから、想いを告げるつもりはないけどね」

携帯を取り出して、時間を確認した。十九時十八分。夜の帳を下ろした空には煌々とした星が浮かんでいる。

「……高橋。もう一つだけ我が儘いっても良い？」

「どうした」

「三十分だけ寝ても良いかな。起きたらすぐに帰るから」

「俺は別に良いけど、明日仕事は？」

「休み」

「じゃあ、八時前に起こすから」

ありがとう、といって、清香は机に突っ伏した。高橋は彼女が眠るまで離れていようと、キッチンの方へと姿を消した。それに気付いた清香は、相変わらず気が利く、と微笑み、そのまま臉を閉じる。瞬く間に——眼を閉じているから瞬きはしていないが——意識が薄れて行った。

……十分程経っただろうか。寝息が聞こえて来たので、高橋は清香の傍へ寄った。そして、ベッドの脇からブランケットを持ってきて、彼女に掛けてやる。

清香は三十分だけ寝かせて、といっていたが、彼女が起きない限り高橋も起こす気はなかった。かなり疲れていたようだし、しばらくは夢の中だろう。

机上のマグカップを片付けようと中を覗き込む。底に溜まった溶け残りに自分の顔が映った。カップはシンクの流しに

置き、水を溜めておいた。

彼女の正面に腰を下ろし、組まれた腕の隙間から覗く端正な顔立ちを、まじまじと見つめる。俺の気も知らないで、と力なく笑った。彼女は叶うことのない恋愛をしていると話していたが、自分も同じようなものだ。

このまま朝まで起きなければ良いのに。そんなことすら考えてしまう。どこまでも愚かだ。彼女の想い人は、自分ではない。高橋自身、そのことは十分に痛感している。

分かってはいるけれど、仕方ないじゃないか。

結局、零時になっても清香は起きなかった。バスの最終便は既に行ってしまった時間だし、仮に起きたとしても、適当にいいくるめて泊まらせるつもりだ。若干の罪悪感を抱きつつも、喜の感情が高橋の理性を削っていることは否めない。

どうせ報われないのなら、これくらいは許してほしい。そんなことを思いながら、高橋は清香を抱き上げ、自分のベッドに寝かせた。それでも彼女は起きない。

静かに寝息を立て、時折寝返りを打つ清香の髪にそっと触れる。柔らかく、艶やか。

「……俺は、何をしているんだろうな」

仲の良い同僚。これまでも、そしてきっとこれからも、高橋の立場は変わることはない。彼女の話が薄情にもそれを証明している。

現実から目を背けるように、高橋は緩く首を振った。

風呂に入ろう。そう呟いて、脱衣所へと歩く。

シャワーを浴びながら、高橋は濡れた頭を乱暴に掻いた。

——本当は明日、休みじゃなかったんだけど。

けれどそのことを正直にいつてしまえば、彼女はあの話をしなかったことだろう。こうして高橋の部屋で一夜を過ごすことにもならなかった。その点彼にとっては好都合だが、申し訳なさの方が勝っている。

彼女の過去を知らなければ、自分はきつと——。そこまで考えたところで、やめよう、と諭すように呟いた。

その日は、身支度を済ませて寝てしまった。勿論ベッドの上ではなく、机に突っ伏して。次の日に身体中が痛みを訴えることは確実だったが、そんなことどうでも良かった。

*

清香の携帯の画面には『十二月二十一日 五時三十七分』という文字が表示されていた。外は暗いが、その時間が午後ではないことは明らかである。

やってしまった。昨夜まで感じていた疲労感はなくなっていたが、今度は焦燥感が心の余裕をじわじわと狭めて行く。

昨夜の記憶を必死に手繰り寄せる。高橋の部屋で話をして、身体が重かったから三十分だけ寝かせてといて——。そこからの記憶が全くなかった。今までずっと寝ていたというとか。

そうだ、どうして自分はベッドの上で寝ていたのだろう。確か昨日は、机に突っ伏した状態だったはず。肌が粟立つのを感じた。まさか、これが一夜の過ちとかいうやつなのか。

いや、そうではないと信じたい。

どうしたものかと寝癖を手で直していると、風呂場の方から、肩にタオルを掛けた高橋が顔を覗かせた。シャツを浴びていたらしい。Tシャツに長ズボンというラフな格好をしている。

「おはよう」

「……おはよう」

清香は思わず顔を背けた。高橋と目を合わせるのが恥ずかしかった。

「ごめんなさい、ずっと寝てたみたいで」

「ああ、俺も途中で寝落ちしたから。悪い、起こせなくて」

清香はそれが嘘だということに気付くことなく、髪を弄びながら高橋に問う。

「……昨日、何かあった？」

そういったところで、間違えた、と思った。

高橋は、ああ……。と声のトーンを低くして、暫く黙り込んでしまった。二人の間に沈黙が訪れる。

「高橋？」

彼の肩は震えていた。それが後悔の念を表すものだと、清香は思っていた。

しかし。

「……笑ってるでしょ」

彼の口角は僅かに上がっていた。そしてすぐに、後悔していたのではなく面白がっているのだと悟る。

何にもねえよ。高橋は口元を押さえながらいった。

「焦ったわ。からかわないでよ」

「考えてみるよ、藤原。元カレとばったり遭遇して、精神的に疲弊してる同僚に手を出す奴がいるか？」

「少なくとも、あなたはそんなことしないって信じてる」

「だろ？」

高橋は白い歯を見せて、にっと笑う。

「それと、もう一つ聞きたい。どうして私はベッドで寝てたの？もしかして寝ぼけて知らないうちに……」

「ああ、それは俺が運んだから。あの体勢じゃあ、身体が痛くなるだろ」

滔々と話す高橋に、清香は額に手を当てながら、どこまでできた人間なのよ、といった。

さて、これからどうやって帰ろうかと再び時間を確認する。起きてから十分も経っていない。バスに乗って帰るにしても、始発便が来るのは一時間以上後だ。歩いて帰るか、タクシーを呼ぶか。昨夜は風呂に入っていないため、公共交通機関を利用するには抵抗があった。

距離はあるけど歩いて帰ろう、と思った矢先、高橋が口を開いた。

「風呂、入る？ 昨日入ってないだろ。着替えはサイズが合うなら姉さんの服使っていいから」

「いや、大丈夫。申し訳ないよ」

「良いから。ほら、行った行った！」

わざと乱暴ないい方をして、高橋は清香を脱衣所へと連れ込んだ。そして彼の姉のものだという服と下着を持って来ると、扉を閉める。今度ご飯奢ろう、と考えながら、清香は服を脱いで風呂の扉を開けた。

その間に高橋は二人分の朝食を作っていた。まるで同様している恋人同士のようなだと頬を緩めたが、後にも先にも今回だけなのだろうと思ひ直す。

清香は全身をしっかりと洗ってから風呂を出た。ふんわりと石鹸の匂いがする。普段使っているものとは違う香りだった。

「上がったよ。お風呂ありがとう」

「丁度良かった。朝食できたけど、食べる？」

「食べる。何から何までごめんね」

いただきます、と二人で合掌して食べ始める。誰かと朝食の時間を共にするのは久しぶりだった。心が温かいような、くすぐったいような、不思議な感覚だった。

その後はタクシーを呼んで、後日服を返すことと食事を奢ることを約束してから帰宅した。

ベッドでくつろいでいた時、清香はそういえば、と思ひ出したようにシフト表を取り出す。

彼は今日、本当に休みだったのだろうか。

確認してみると、休みではなく、夜勤となっていた。彼は清香に気を遣って嘘を吐いたのだと、その時初めて知った。

——私は、彼に甘えてばかりだわ。

彼のことは信頼している。けれど、あくまで同僚として。だから、恋人でもない異性の部屋に泊まるのは、昨夜がきつと最初で最後だ。

*

「待つて亮。今、何ていった？」
年に一度の聖夜は既に終わり、今年も残すところ四日。雪が降るわけでもなく、ただただ凍てつく風が外を吹き抜けている。

清香は暖房の効いた部屋で、電話越しに喋る人物の話に耳を傾けていた。今日は夜勤明けだった。いつもなら眠気に抗うことなくベッドに潜り込むのだが、今はそれすらも吹き飛んでいた。

「そろそろ玲子さんにちゃんと気持ち伝えないと、って思つて。だから、背中押して欲しいんだよ」

「クリスマスに食事に行つたんじゃないの？ どうしてそこでいわなかったの」

「……直前になって緊張して、結局何もいえなかったんだよ。笑いたきや笑え！」

「馬鹿じゃないの」

そういつつも、清香は自身が酷く動揺していることに気付いていた。携帯を持つ手が僅かに震えている。その反面、二人が交際を始めるのも時間の問題だろうなどと、現実を受け止めようとしているのも事実だ。

清香は、冷静を装って語りかけるようにいった。

「……絶対に大丈夫だよ。今までずっとアピールして来たんでしよう。玲子はそれを嫌がっているように見えただけ？」

亮は少しだけ間を開けて、いつも嬉しそうにしてくれていたと思う、と答えた。

「ほらね。だから自信持ちなさいよ」

「そっか。うん、ごめん。ありがとう」

「じゃあね」

清香は電話を切った。これ以上話していると、全てを暴露してしまいそうだった。

亮に絶対に大丈夫、といい切ることができたのは理由があった。昨日の出来事を辿るように、玲子とのチャット画面を開く。

チャットは、玲子のメッセージから始まっていた。

『ちよっと聞きたいことがあるんだけど、良い？』

『どうしたの？』

『亮君って、恋人いる？』

『好きな人はいるけど、恋人はいないらしいよ』

『そっか。あのさ、清香。違ったり、知らなかったりしたら無視してね』

『え、何？』

『その好きな人って、もしかして私のことなのかなって』

改めて見ていて、スクロールする手が止まった。

この文章が送られてきた時、頭を鈍器で殴られるとまではいかないものの、かなりのショックを受けた。

彼女は亮からのアプローチに気付いていたのだ。

清香は、分かってたんだね、と送っていた。そして、なぜ彼の気持ちに応えないのかも尋ねていた。

『亮君が本当に私のことを好きでいてくれるのか、確信が持てなかった。あと、恋愛をすることに臆病になっていたから、かな』

その答えに、なるほどね、と納得したのを覚えている。

最近まで交際していた男を含め、玲子は散々な振られ方をしてきた。それが今後の足枷になってしまうことは容易に想像できる。

『結局決めるのは玲子自身だから、私からは何ともいえないけど。良い報告を待ってるよ』

本心ではないことを告げた。

携帯をスリープ状態にし、ベッドに背中を預けた。今は何も考えずに眠りたかった。

涙は出てこないものの、喉がやけに苦しい。部屋は暖かはずなのに、息をする度に冷気を取り込んでいるみたいだ。

きつと、次に目を覚ます頃には、二人から結果報告のメッセージが届いていることだろう。その時、清香は今まで抱いていた想いを断ち切らなければならない。

——数時間後、清香の予想通り、二件のメッセージが彼女の携帯に届いていた。一つは長い付き合いの同僚から、もう一つは昔から可愛がっていた従弟から。

どちらも内容は同じで、清香が望まない——彼らから見れ

ば幸福に満ち溢れた結果になったようだった。

清香はそのメッセージをひとしきり眺めると、震える指先を画面に滑らせた。

『良かったね、おめでとう』

一人にはその文章だけを送った。もう一人、清香の想い人には、それに加えて別の文章も付け加える。

『でもね。きっとあなたは気付いていなかったと思うけど、私もあなたのことが大好きだったよ』

これが最後の足掻き。もう、綺麗な関係には戻れない。それでも、送信取消を押すつもりはない。

既読が付いた。返事は分かっていた。相手から返事が来る前にアプリを終了して、今度は母へと電話を掛ける。三回目のコールが鳴り終える前に繋がった。

「もしもし、清香だけど」

「はいはい。どうしたの」

「ごめん。明日そっちに帰ったらさ、髪を切って欲しいの」

「え、切っちゃうの？ 別に良いんだけど、何かあった？」

「うん、色々」と

「……そう。分かったわ」

待ってるからね。その言葉に清香はうん、と短く返事をし、電話を切った。深くまで理由を探られなかったのは、同じ女性として察しが付いたからかもしれない。

清香は片耳にだけ空いているピアスホールに触れる。今は何も付けていないが、確かに重みがあった。

「……結局、無駄になっちゃった」

彼女の想い人は、最後までピアスに込めた意味に気付かなかった。

でも、逆に良かったのかもしれない。心の内を悟られなかったから、今までの関係が歪むことなく続けられたのだから。

清香は高橋にメッセージを送っていた。甘えてはいけなさと分かっているけど、誰かに吐き出したかった。そうでもしないと、きつと区切りを付けることができないだろうから。

*

『玲子と私の従弟が交際を始めるんだって』

『私、失恋しちゃった』

それを見た高橋は、ああ、そういうことだったのか、と呟いた。

一週間程前、バスの中で彼女がいったことを、今になって思い出す。

——願掛けみたいなものよ。

なぜ片耳にだけピアスを空けているのか尋ねた時の答えだ。

きつとそれは、想い人への意思表示。

片耳に偶数個のピアスを空けると、左右によって異なる意味を持つ。女性が右耳に空ける場合は『優しさと成人女性の証』、反対に左耳だと『同性愛者』

インターネットで検索し、一番上に表示されたページには、

そう書かれていた。

彼女は叶わない恋だと分かった上で、それでも僅かな可能

性にかけていたのだろう。結果、それは報われなかった。

高橋は衝動的に電話を掛けていた。相手は勿論、仲の良い同僚。ずっと想っていた彼女だ。

一回目のコールで繋がった。もしもし、と清香が先にいう。

「あのメッセージ、どういうこと」

「そのままの意味。ごめんね、急に」

彼女の声はいつもよりいささか暗いように思えた。

「あの子のことを好きになるのが遅かったんだわ」

独り言のように呟く彼女。あの子というのが彼女の従弟と玲子のどちらを意味しているのか、高橋は記憶を辿った。

右耳の『優しさと成人女性の証』、つまり女性らしさをアピールするなら従弟、左耳の『同性愛者』なら玲子ということだろう。どちらにせよ、それぞれに該当するのは一人だけ。

そして、彼女がピアスを空けていた方の耳は――。

思い出すより先に清香が、ごめん、ともう一度いった。

「忘れて。何でもない。私、甘えてばかりだね」

彼女が通話を終了しようとする気配がしたので、待つて、と止める。

そして、絶対に伝えないと決めていた言葉を、一呼吸置いてから口にした。

「俺も藤原のことが……っていったらどうする」

清香はすぐには返事をしなかった。代わりにくすくすと笑い始めると、どこか合点したように溜息を吐いて、穏やかな口調で話し始めた。

「そういうことだったの。全く、私は馬鹿だわ」

「俺も、同じようなもんだよ」

「……隣れね、お互いに」

「本当に」

結局、彼らの関係は既に歪んでいたのだ。目の前のことに必死で、それに気付けずにいた。

笑い合う二人の双眸に涙が滲む。相手の目元を拭える程の距離にいないことが、やけにもどかしかった。